

別表Q2. マスターの研究力が低下した理由

1) 授業が多く、実験時間が確保できない。
2) 就職活動に出歩いて実験時間が確保できない。
優秀な学生が、入学してきません。そもそも地方大学農学系では、大学院の進学率が10年前に比較して激減しています。
研究職を目指す成績の優秀な学生は他大学の大学院に進学するため。
学生の基礎学力の低下が見られる。論理的思考が苦手な学生が増加。思考訓練不足。
英語や論理的思考などの基礎的能力が低下していると思います。また、研究に対する取り組み意欲も、低いわけではありませんが、ハードワークする学生が少なくなっているように思います。
座学が多くなり、実験中心の研究時間が少なくなったため。大学の運営交付金が減り、科研費等を持っている研究室とそうでない研究室との格差が大きくなり、そうでない研究室に配属された学生の研究力は極めて低く、パソコン上での研究のみである。
・基礎研究そのものに対する熱意を持たず、学部時代にしかるべき教育を受けず（あるいは受けても身につけることができず）に、修士課程修了が就職に有利との考えに圧倒的に支配されて、大学院に入学する学生が大半になっている。
・上記の「気風」には、博士後期課程に所属する先輩が経済的なサポートを必ずしも受けられない現実など（後述）が、拍車をかけている。
・熱意を持っていても、学部時代にオーソドックスな研究への取り組み方を学ばずに、我流に走ってしまって再学習できない学生も目立ってきている。これらの学生は研究室配属後に問題を起こしたり、引きこもってしまうことが多い。
所属が京大ですが、学部生が就職を選び、私学の学生が京大院卒の肩書きを得るために大学院に進むため、そもそも学術研究を続ける意志はなく、修士研究のみ経験のため行うケースが急増している。
就職優先で就職が決まるまで本気で研究姿勢が整えられない。マスター論文の基準が明確ではない。
・問題解決能力の欠如（受け身：実験を含めて全てのことを「教えてもらえる」と考えている）
・自主性の低下
・研究をする時間（研究室に滞在している時間）が激減している
・その理由の一つが、就職活動
多様な理由があり相互に関係があると思います。学生側の意欲の低下（生活が厳しく研究に集中できない。・現状で満足なため努力意欲がでない。・余裕のある生活をしたい。・就職活動の長期化など）もある一方、教員側の多忙さや厳しい現実により修学環境、研究環境が行き届かないこともあると思います。
・大学院の入試が極端に簡単になっており、入学に当たって競争が無くなったこと。
・研究に対する熱意が不足している。
・能力が高く、熱意も十分な学生はもちろん現在もいるが、その割合が減っている。
就職活動に時間がかかる
苦労が少なく、精神年齢が低いこと。表面上人とうまくやっていく能力はあるが、その分、反骨精神に欠ける。TAや講義など雑用が多すぎてじっくりと研究に打ち込めない。
学生自身がじっくり研究する期間がとれないから（就職活動時期の問題）。教員不足。組織によっては、教員数が低下し、十分な研究活動時間を確保できないから。
理由は正直、よくわかりません。ただし、低下しているのは間違い無く、今の修論レベルは、少し前の卒論+ α 程度になってしまっている印象です。自分で研究してみよう、という意味が希薄になっており、先生に言われたことをやれば良い、というように考えている節もあります。
就職活動の長期化のため
自分の頭で考える能力を養われていない。言われたことしかできない学生が増えている。
・大学が地域貢献ばかりを強調するので、基礎研究志向の学生は他大学院に進学するようになった。
・就職活動が忙しい。
・日本語も英語もわからない留学生が増えた。
優秀な学生の就職がすぐに決まり、大学院に進学しないため。
また、優秀な学生が進学をリスクと考える場合が多いため。
就職活動の時期の変化、少子化による学生の質の低下
大学入学時点での基礎学力が低下している。そのため、学部教育を10年前よりも高度化・活性化させて対応しているが、研究力の低下を埋め合わせるほどまでには至っていない。
あくまで個人的経験だが、研究に集中できない学生、就職活動に時間を取られる学生が増えている感触がある。学生の責任というよりは、企業側の体制の問題のような気がする。

よい人材が大学受験の段階で薬学部、看護学部に流れている
本学科では8年程前から一学科制をとっており、目的意識の少ない学生が多く集まっている。また、タコ足大学であることから、1年次に集中して基盤教育を行うため実験実習がない。2年次以降も総じて実験実習が少ない。学生自身も実験で必要な筋力、平衡感覚、反射神経が低下しているようで、実験実習での事故や怪我が増えた。また、こうした問題は小・中・高校で実験を増やす事、実験によって自ら考える習慣をつけることである程度解決できるかもしれない。また、大学院の重点化が進み、地方大学から旧帝大系へ修士から進学する学生がほとんどで、内部に残る学生は少なく、残った人材については意欲の低い負け組のような意識の学生が多く、悪循環となっている。こうしたことが総合的にマスターの研究力の低下の原因ではないかと考えている。
全般的な学力低下。大学での教員多忙化、助教・博士学生などラボスタッフ減少によるマンツーマン教育の困難さ。
高校までの基礎学力の低下。プレゼンテーション能力に長けているが基礎学力がない学生の増加。指導されることでしか実験を進められない自主性が低下した学生の増加。
修士の間にここまでやるといった明確な目標を持たない院生が増えている気がする。アルバイトが常態化している。(生活費、就職活動費、奨学金返済のためなど)
<ul style="list-style-type: none"> ・日本人の学生：マスターに進学した時点で、自分はこの程度であると判断して自身を高めようとする努力をあまりしない(してもすぐに息切れする・諦めることが多い)。集団になると、低い方に引っ張られてしまう。 ・留学生：向上心が強いので、チャンスを活かすことが出来ている。出身国が発展中であることが多く、帰国後のポスト獲得に明るい展望を持っていることも一因と思われる。
所属する大学においては、優秀な地元高校生が東北大、東大等の上位大学に進学することが増えた。これは少子化による入試の難易度の低下、地元の人口減による魅力の低下、SSH等による上位クラス者の上位大学進学に対するモチベーションの上昇、新幹線及びインターネットによって地元や親元を離れる事に対する物理的・心理的垣根が低くなったこと等、複数の要因による。これにより学部学生の能力が下がり、大学院進学者の数も減っており、質も低下している。同様に大学院進学においても、旧帝大に進学する学生が増えており、地方大学大学院に質の高い学生が残りにくくなっている。少子化による就職率が高いことも、大学院進学学生を減らす要因となっている。
学生については、勉強量が足りない、研究に使う時間が減っている。また、深く考えるという習慣を身に付けさせるのが難しくなっている。ウェットな実験よりはコンピュータに向かっている時間が多く、そちらを好む傾向が強い。 教員としては、会議や書類作成などで、学生と過ごせる時間が減り、データなどの議論に使える時間が足りないため、十分な指導が出来ない。
学生の学力の低下もさりながら、探究心、やる気、自主性、実行力、頑張りに対応する力が低下しているのが原因と思う。
そもそも学生のレベルが下がっているので、修士課程の研究力も低下している。就職活動をさせないとパワハラなどで訴えられる可能性が高く、就職の内定が得られるまで、ほとんど研究をしてもらえないのが実情である。
<ul style="list-style-type: none"> ・過去に比べて、博士前期課程の授業が増え、就活時期も早くなっており、学生がじっくり研究に取り組む時間が減少している。 ・授業は増えているのに教育課程が体系化されておらず、授業も高度ではなく、学生は受け身なままで、期待される研究構想力・デザイン能力の向上につながっていない。
アカデミアの研究職が、学生にとって魅力的な職業と感じられていない様子である。したがって、就職活動第一となり、研究そのものに注力しない。
修士課程で卒業する学生が多いことからどうしても就職活動を重視することになるため、研究に使う時間そのものが少ない。また博士課程の学生が少ないために先輩から学ぶという機会も少ない。さらに卒研の4年生も進学決定が遅いので修士課程の学生が卒研に教えて学ぶという機会も少なくなっている。おしなべて自ら学ぶという機会が減っていることがマスターの研究力の低下を招いているように思う。
文章力、特に構成力の低下が目立つ。論理的な文章を書くことがなかなかできない。文章を読む量が圧倒的に減っているのではないだろうか。
教員が研究に従事できる時間が激減し、学生にきちんとした研究指導ができなくなった。学生自体の潜在能力はむしろ以前より高いと思う。
知識を広げるために大学院に入ってくる学生が多くなり、研究や実験に真剣に取り組む気持ちが少なくなってきた。
就職活動やインターンシップ他の研究以外の活動が増え、研究に専念する時間が減った。
大学の附置研究所で、学部から上がってくる学生が激減し、他大から修士2年間だけ腰掛け的に進学してくる学生が増えたからだと感じている。
就職活動の前倒しや、複数企業・地方自治体へのインターンシップに参加することが多くなり、十分に研究室に来られない学生が多いため。

<p>本学薬学部には、薬剤師免許の取得を目指す薬学科（6年制、定員40名）と、薬剤師免許は取得せずに研究者・技術者を目指す薬科学科（4年制、定員40名）があり、年々薬学科の人气が高まり、成績レベルも高まってきている一方で、薬科学科の受験生のレベルは低下している傾向にある。薬科学科の学生のみがマスターに進学するので、その影響が徐々に出てきていると思われる。</p>
<p>就活のために研究時間と研究への意欲の低下 基本的に研究への学力、資質、意欲が低下してきた</p>
<p>研究に没頭する学生が減っている。ハングリー精神が低下しているのは、比較的恵まれているから。</p>
<p>与えられた論文を読む力に関してはあまり変わっていないと思いますが、研究や学習に対しての積極性が低く、自分で論文を見つけたり、実験法を調べることが習慣になっていません。他の論文で言われていることを、自分が今できる手法でなぞるような計画を立てることが多く、新しい現象を見つけて論文として世に出すことへの興味が減弱していると思います。</p>
<p>独創的な考えを持つ、自由な発想をする学生が減ってきているように思う</p>
<p>これは研究室のあり方によりますので簡単には答えられません、が全体的にはそのような声を耳にします。私の研究室では、できるだけ多様なチャンスを与えて、意欲を掻き立てる工夫をしています。</p>
<p>就職活動に費やす時間が極端に増加しているなど、学生さんを取り巻く環境が変化し、研究活動に没頭する時間が減少している。</p>
<p>少子化により学生数が減っているにも関わらず、大学の学生の定員は減っていないため、基礎学力の低い学生も入学している現状、および初等教育や大学入試による影響だと思います。</p>
<p>就職するためには修士卒が必要であるという理由で、そもそも研究をやりに来ない学生が増えた。</p>
<p>大学院が全入状態になっており、特に研究をしたい人だけが進学しているわけではなく、意欲のない学生が多い。大学院講義の実質化が行われ、修士1年時はほとんど講義に参加して居る院生が多く、研究力が身に付かない。修士2年時の半分は就職活動である。研究能力としては、修士卒で昔の学部卒程度である。薬学系は特に併設の6年制が6年間学部生で存在するため、同期の4年制の学生も修士に進学しても大学院に進学している雰囲気では無い様子で学部の延長と考えている院生が多い様に思える。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・就職活動（特にインターン）の長期化 ・大学の研究環境の悪化 ・研究職に対するネガティブイメージ（もしくは本当に職業としての魅力を失いつつある）
<p>を理由とする、研究職を目指す学生の割合の低下</p>
<p>高校までの教育が大きい。個々の学生のポテンシャルはあると感じるが、意欲が低い学生の研究力を修士2年間で上げるのは不可能に近い。そのような学生に限って、就職などの周りに影響される。一方で大学教員の指導の仕方にも一因があるように感じる。インパクトファクターの高い論文が評価され、研究の中に十分条件であるリベラルアーツを感じる事が少ない。リベラルアーツの部分が意欲と大きく関係する。</p>
<p>就職が気になり、実験・研究に集中できない。</p>
<p>1) 学生人口の減少により同じ偏差値の学生なら学力は低下する。2) 就職への心配が先立ち、自由に学ぶことへの楽しみや意欲より、就職のためのキャリアの1つとして修士を捉えて進学するため、研究への取り組みに身は入っていない。</p>
<p>根気よく基本的なことをしっかりと見につけようという努力が足りないように感じる。ごく最近の学生は向上しているように思うことから、ゆとり世代と関係があるのかもしれない。</p>